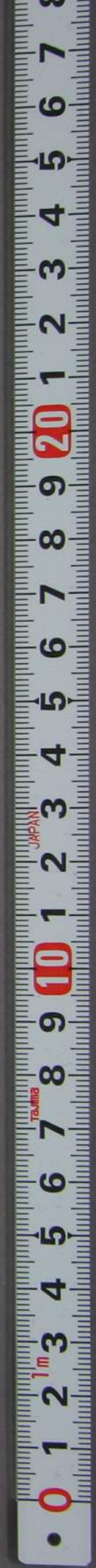


114  
A 2964



貴社若し充分ナル新聞ノ餘白ヲ与ヘハ余ハ三菱會  
 社ノ地位ト形況トヲ批評シ合セラ社業ノ攝理ソノ  
 當ラ得ス且ツ海通商ノ發達ヲ補益セスメ却  
 テ之ヲ妨害シ以テ該會社ノ設之ヲ保助シタル賢明  
 ナル政界者ノ希望ニ背キ内國商業ノ結果ヲ  
 シテ衰頹ニ属セシムベキヲ論セントス  
 太平海郵船會社ノ占有シタル上海線路ハ一千八百七  
 十五年台灣征役終局ノ後三菱會社ニ於テ全ク  
 之ヲ買取りタリ而シテ岩崎氏兄弟ハ曖昧ノ方畧ヲ

大正十一年四月  
 侯爵岩崎





以テ其頭角ヲ出シ遂ニ會社ノ支配ヲ掌握セリ氏  
ノ往事ヲ見レバ大坂ト土佐ノ間ニ航走シタル後々ヨル  
小汽船ヲ通航セシムルニ關涉シタルニ外ナラズ然ルニ  
三菱會社ハ凡ハ拾万圓ノ金額ヲ以テ左ノ汽船ニ  
海丸東京丸西京丸名サ護屋丸廣島丸及ビ其他  
拾五万弗ノ價アル上海會社ノ家屋土藏波戸并ニ  
長崎及神戶ニ繫キタル倉庫船浮標等ヲ得タリ  
斯ク新タニ購求シタル其線路ニ適當シタル右ノ船舶ニ  
加ヘテ僅ニ二千二百英里ノ間平均三十箇ノ郵便物ヲ搭  
載センカ者ノ賦与セラレタル月々ノ保助金二万余圓ノ

金額ヲ以テ事業ヲ創始セシニ該社ハ只繁榮ノ域ニ  
進ムルノミニシテ事物トシテ三菱會社ノ幸福トナシ  
ルコトナク客歲征薩ノ後ニ際レテヤ僅カニ九ヶ月間運  
送用ニ從事シタルヲ以五百萬圓餘ノ金額ヲ收領シ  
タリ當時上海通航ノ郵船ハ之カ者ニ防害セラレ  
タルコトナク陸軍省運送ノ用ニ從事シ斯ク巨大ノ收獲  
ヲ得タルハ唯他ノ汽船ヲ以テ之ニ備エタルノミ而シテ此等ノ  
汽船ニ費用シタル石炭ハ陸軍省ヨリ別ニ其代價ヲ拂  
フタルガ故ニ諸御用船ノ收獲金ハ全ク純益金ト云フ  
モ可ナルガ如シ



左ニ掲ル所ハ征後中ニ使用セラレタル船舶ニメ其總價額ハ六拾五万圓ニ過キズトス若シ其收獲ノ金額ヲシテ大過ナカラシメバ三菱會社ハ使用ニ供シタル船價ノ八倍ヲ收領シタリト云フベシ

愛宕丸 器械及汽鐘用ニ堪ヘス即今倉船

千里丸 全

萬里丸 全

金川丸 全

千歲丸 器閥及汽鐘不充分

玄龍丸 全

平安丸 全

兵庫丸 器閥及汽鐘可也

蓬萊丸 器閥及汽鐘不充分

九州丸 全

後修繕ヲ加フ

快順丸 全

貫効丸 全

黃龍丸 全

浪花丸 全

青龍丸 全

赤龍丸 全

後ニ修繕ヲ加フ



錫懷丸 全

社寮丸 器閘及汽鐘可也

品川丸 全

隅田丸 全

太平丸 器閘及汽鐘不充分即今倉船

瓊浦丸 右可ナリ

東海丸 右不充分 即今修繕中

豊島丸 右可ナリ

敦賀丸 全好良

客歲英船ヲ購求シタルニヨリソノ船舶ノ數ヲ增加セ

レト魚モ新購ノ船舶中戰役ノ期ニ應シテ實際其用ヲナセシモノハ甚タ少シ

秋津洲丸 千四百十六噸 千八百七十三年 製造 元價拾七方五千弗

九重丸 千百三十三噸 同七十九年 製造 全

熊本丸 千二百四十一噸 同年 製造 全

住能江丸 七百五十二噸 同七十一年 製造 全拾三万弗

高千穂丸 千四百〇七噸 同七十三年 製造 全貳拾壹万弗

和歌浦丸 千三百四十四噸 同五十四年 製造 全拾五万弗

此等ノ船舶ハ余ヲメ之ヲ云ハレムレバトシテ日本及支那海ノ通商ニ適当シタルモノト云フベカラス何トナレバ



該船舶ハ往々其運用石炭ノ消費及ヒ一般便利ノ如  
何ニ關シテ節約ナラズ大ニ無益ノ費用ヲ要スレバナリ  
之ニ及レテ即今支那ノ沿海ニ於テ船位一尋ニメ水入  
淺ク其積量ハ以上ノ諸船ニ減セズ而シテ一昼夜ニ八噸  
ノ石炭ヲ消費シ一時九里ヲ航走スル新船アリ之ヲ以  
テ以上ノ諸船舶ニ比スレバ購求ノ船價ハ其半額ニシテ  
運用ノ費用トモ殆ント一半ヲ減スベキナリ

昨年三菱會社ニ於テ購求シタル船舶ハ寧日船ニ  
メ新船ト云フベカラス何トナレバ住能江丸ノ汽罐ハ既  
ニ朽敗シ秋津洲丸高千穂及和歌浦ノ汽罐ニ三年  
以上ヲ保ツニ足ラズ熊本丸九重丸モ亦四年以上ヲ保  
ツニ足ラズ

蓋シ旧船ヲ修繕スル者ノ工事ヲ起スノ失措タルハ  
一般ノ經驗ヲ以テ世上ノ齊シク確認シテ疑ハカク所ナ  
リ然ト雖岩崎君ハ此公論ニ及シ斯ク物料及精  
工ナル工手ノ高價ナル邦ニ於テ旧船ヲ修理シテ其功  
ヲ遂ントシ巨額ノ金員ヲ浪費セリ而シテ斯ク公論  
ニ及シ修理シタル各船ノ中或ハ無代ヲ以テ之ヲ得ルモ  
尚好ムベカラザル贅物アリ

新潟丸高砂丸ハ唯汽罐及器械ヲ新製スルノニ



三菱商會  
レテ其費ス所ノ金額ハ以テ運送ニ適當セル最一等ノ  
新船三四艘ヲ購來スルニ足ルベシ且ウ此二船ヲ英國ニ於  
テ修繕スルニハ其往復ノ時日ヲ併セニケ年間ヲ費ス  
ベシ其歸國ノ後トモ必スレモ方今ノ需用ニ適セス且  
ツ費金ノ半ハシ價セザルハ必然ナリ而シテ三菱會社  
ノ船ハ渾テ煤炭ノ多量ヲ要スルニ會社ハ極メテ  
之カ費用ヲ節約スルノ方法ニ出テスレテ却テ澳斯  
太利亞ヨリ石炭ヲ輸入購來シ其價額ノ如キハ只輸  
入者ニシテ利益ヲ与ヘレノミナリ而シテ三菱會社ニ於テ  
石炭及需用品等ヲ供給スルノ不注意ニメ且取

締ナルハ尚他日十分ニ論及スルコトアルベシ然レモ余  
輩ハ此ニ一言ヲ費サ、ルベカラズ蓋シテ三菱會社ハ  
日本工業ノ進捗ヲ補助セシカ爲メ設テラレタ  
ルモノニテ就中汽船ノ經濟上ニ大問題先石炭ノ  
事ニカシクサ、ルベカラザルナリ元來該社船舶ノ  
汽罐ハ低價ナル粉炭ヲ用ユベキ装置置アレモ高  
島炭鑛ノ鑛主ト岩崎氏トノ間ニ此ニ少ノ不平ヲ  
懷キタルヨリ却テ多量ノ石炭ヲ高價ニテ外邦  
ヨリ輸入シ三菱會社ハ之ガ爲ニ其利益ヲ犧牲トス  
ニ至レリ



今岩崎氏兄弟ハ日本ノ國力ニ大關係アル事業ノ一  
ツ管理スルノ人ナルニ恰モ其責任ノ重ヲ知ラザルモノ、  
如レ一時同氏ハ專ラ該會社船舶ノ用ニ供スルガ為メ  
別ニ船渠ヲ建築セント銳意熱心他念ナク更ニソノ  
費用ヲ顧ミズ又タ日本海ヲ航走スル船舶ノ數ニ比スレ  
バ日本ハ他邦ヨリモ餘計ノ船渠ヲ有スルヲ頗着セ  
ガレナリ又或時ハ其目的ヲ變シ焦慮熱心シタルモノハ  
保險會社設立コレナリ余輩試ニ問ハントス同氏ハ  
汽船會社ノ管理ニ於テ既ニ此ノ如キ失敗暗ニ告諭  
書ノ趣意ヲ指スヲナシタリ今若シ保險事業ヲメ

三菱會社ノ擬理セルモノナラシメハ保險社株金ノ  
景状果シテ如何シヲ知ラサルナリ  
先年支那招商局カ社業ノ着手ニ當テ艱難ニ  
遭遇シタルヤ之ヲ恢復スルノ方便只保險會社ヲ  
設立シテ之ト合併スルノ外ナク而シテ終ニ之ヲ設立シ  
タリシニ保險資本金貳拾兩ハ賸餘ノ中ニ混シ行  
ク所ヲ知ラズソノ成果タルヤ果シテ如何ソヤ去ルニ  
月中二艘ノ汽船ヲ失ヒタルヲ口實トナシ保險會  
社其株主ニ利子金スラ配分カセサリシニアラスヤ故  
ヲ以テ支那人ノ保險會社ハ富貴家ナル支那人ノ



信用ヲ失ヒ却テ外邦人ノ保險會社ヲ信スルニ至  
レリ  
夫レ乘客貨物ノ別ナク全ク日本沿海廻漕ノ專  
權ヲ占有シ且ツ寬厚ノ保助金ヲ仰キ非常ノ便  
益ヲ有スルコト此ノ如キモ岩山壽氏ノ報告ヲ果シメ信  
ナラシメハ創業僅ニ三年ニシテ該社業ハ殆ビド瓦  
解ノ結果ヲ現ハセリ太平海郵便會社ハ斯ル便  
益ヲ有セザリシモ此航路ニ於テ一ヶ月九ソ一万五千  
弗ノ純益ヲ生シタリ

今日三菱會社ノ方畧ヲ見ルニ内國通商ノ便益  
ヲナサスレテ却テ之ヲ抑塞毀滅スルノ趣向ノ如シ  
左ノ比較ハ英國ト東方諸港トノ間ニ於テ前數月  
ノ間施行シタル運賃割合ト三菱會社ノ改正シタ  
ル運賃割合トヲ掲ケタルモノニシテ以テ余カ主張  
スル所ノ說ヲ証スルニ足ルベシ抑モ一等ノ汽船ヲ以テ  
英國ト支那ノ間即チ一万五千里程ヲ運搬スルノ  
運賃一噸ニ付七弗五拾仙ナルニ三菱會社ノ運賃  
割合ニヨレバ横濱ヨリ函館ニ到ルマテ六百里程ノ運  
賃一噸ニ付六弗ナリ  
三菱會社カ收領スル此ノ如キ運賃ノ割合ハ實ニ



抑塞ト云フベキモノニメ曲辰者ハ豊富ノ收納ヲ得ル  
モ却テ凶年ニ劣レリ何トナレハ之ヲ遠ク市場ニ輸  
送スルヲ得ズレテ者ニ咎ナカラ損失ヲ蒙レハナリ加  
之運賃ノコノ割合ヲ永ク保存スルヤハ却テ多ク  
ノ外國船ヲ招キ沿海ニ航走セシムルノ自由トナリ  
且ツ日本人ト雖モ別ニ社ヲ設立シ廉價ニメ適  
当ナル船舶ヲ購來レ以テ三菱會社ト競争シ  
大ニ之カ不利ヲ醸サントス

大和船ノ航走モ亦三菱會社ノ抑制ト不當ナル  
專權ノ下ニ興起スルノ勢アリ若シ是等ノ船主

從來ノ功驗ナキ方帆ヲ廢シ支那人ノ裝帆ニ倣フニ至  
ラバ其抗抵實ニ恐ルニ足ル而シテ全國沿海ノ通商ヲ  
便益スルノミナラス大和船ノ乘組水主ヲメ老練ナル  
航海者トナシ自任自信ノ氣象ヲ養生セシメ大ニ  
危険ナリシ生命財産ヲメ安全ノ域ニ至ラシメン  
抑外國形ノ船舶ヲ用ヒ其成法ニ従テ事業ヲ執ラ  
シニ外國人ハ日本人ニ優リテ其事ニ習熟セリ日本人  
ハ未タ此等ノ事業ニ就テ經歷ヲ得ガレナリ航海  
者ハ終生危難ノ中央ニ生スルモノニシテ此危険ノ地ニ臨  
ミテ狼狽スルコトナク事ニ臨ミテ機ヲ誤ラザル神心



ノ落付ト航海者ノ事業ハ敢テ一朝一夕ニシテ學  
ビ得ベキモノニ非ズ此日本人ノ宜ク記スベキ事ナリ  
三菱會社ノ為ニ不利ナル報告ヲ出スヲ以テ満足  
セズ未ダ數日ヲ出ザルニ今將ニ五十万円ノ出金ヲ以  
テ起業公債ノ名譽言ヲ瀆サントス今吾輩氏ノ  
所行ヲ見ルニ三菱會社ハ如何ナル不幸ヲ被ルモ  
氏カ斯ル巨額ノ金額ヲ左右スルノ權カアル文  
ケハ岩崎氏ノ私財ニ増加ヲ与ヘト批評セサシ  
得ス將タ又タ虚飾ノ為メナランカ然ラサレバ  
氏ノ演舌書ハ無根ノモノタルベキナリ